

<海外情勢>

『 緊迫する台湾と日中の関係 』

【後編】

日中間に眠る「奥深い関係」を探る

日本と中国、台湾の間には、表に出ない深い関係がある。

近代以降、日本や中国は西欧列強に蹂躪（じゅうりん）され、固有の文化を失おうとしている。日本の先人、先輩たちは邪悪な西欧合理を退け、東洋哲理を敷衍（ふえん）するために叡智をしばり…カネをつぎ込み…そして国土を失ってきた。

大統領選後の米国が混乱する今…日本・中国・台湾は…どう動くのか——

「台湾侵攻」圧力を強める習近平中国

2016年1月に行われた台湾総統選で、野党民進党の蔡英文が圧勝したとき、中国からはこんな声が上がった。「**2020年の総統選で蔡英文が再選されたら、中国軍は台湾に武力侵攻するだろう**」。2018年の統一地方選では民進党が大敗。責任を取って蔡英文は民進党主席を辞任。次期総統選の出馬も危ぶまれた。その危機を乗り越えて昨年1月の総統選に立候補した蔡英文は、香港騒乱を追い風にまたも圧勝。国民党・韓国瑜を支援した習近平に歯ざしりをさせた。

その後中国は台湾に対する圧力を強めるが、周辺諸国を中心とする中国包囲網も強力なものになっていった。米国は南シナ海海域に艦船を往来させる「**航行の自由作戦**」を展開。この挑発的な作戦名を安倍晋三は「**自由で開かれたインド太平洋**」といい換え、これが世界共通語になったが、かといって「**航行の自由作戦**」が消滅したわけではない。

先日の大晦日にも、米第七艦隊の駆逐艦2隻が台湾海峡を通航。中国側はこの駆逐艦を追尾、「**断固反対**」と米側を非難している。中国は総統選で蔡英文が再選されて以来、台湾に対する軍事圧力を内外に吹聴している。昨年（2020年）9月には、人民解放軍東部戦区が軍事訓練の様子をビ

ビデオ映像として公開した。人民解放軍の戦士が市街殲滅（せんめつ）戦を進める様子が描かれたビデオ映像だが、そこには台北の街並みが見事に再現され、商店や食堂・カフェなども実物そっくりだった。（東部戦区とは旧南京軍区。福建省・安徽省など5省と上海特別市が含まれる。）

さらに翌10月には上陸用舟艇（しゅうてい）数百隻を擁した大規模な上陸演習もビデオ映像として公開している。あたかも、今直ぐにでも台湾侵攻が実行されそうな雰囲気を作り上げ、台湾市民を脅迫している。こうした中国の挑発に乗るかのように、米政府の台湾への武器輸出も活発だ。10月下旬には**空対地ミサイル 1,900 億円**の兵器輸出を承認し、その5日後には対艦ミサイルなど**2,500 億円**の武器輸出を承認している。オバマ政権時代には台湾への武器輸出はほとんど行われなかったが、トランプ政権の4年間では**総額1兆 8,000 億円**の武器兵器輸出が行われている。台湾有事は仮想の領域から現実のものになりつつある。

その別荘で、毛沢東は蒋介石の思い出に浸った

「日は香炉を照らし紫煙生ず、はるかに看（み）る瀑布の長川にかくるを。
飛流直下三千尺、疑うらくはこれ銀河の九天より落つるか」と

詩仙とされる**李白**の『望廬山瀑布』に詠われる**廬山**（ろざん）は中国4大避暑地の一つで、世界遺産にも登録されている。この地には19世紀以降、20を超える国々の別荘が建てられた。今でも500棟以上の豪華な別荘が残されているが、その中でも威厳のある建物といえば**美廬**（びろ）別荘だろう。1903年に英国人が建てたもので、その後、英人女性が**宋美齡**に贈呈。宋美齡の夫の**蒋介石**が愛用した別荘である。

1949年10月1日に北京の天安門上に立ち、中華人民共和国の建国宣言を行った**毛沢東**は、同年11月末に重慶を陥落させ、中国大陸をほぼ掌握することができた。その直後に毛沢東は廬山の美廬別荘を訪れ、蒋介石の個室にこもり、蒋介石愛用の椅子に座って長時間本を読み、思いにふけたと伝えられる。毛沢東にとって6歳年上の蒋介石は、最大の敵であり…友であり…敬すべき先輩だった。毛沢東は蒋介石を憎み、敬慕していた。この毛沢東の複雑な思いこそ、中国と台湾の関係を物語るすべてだろう。

裕福な客家地主の息子に生まれた**鄧小平**は、16歳のときに働きながら勉強する「**勤工儉学**」として渡仏。フランスにあった中国共産党本部で共産黨員となる。その後、客家人脈を頼って仏ロスチャイルド家当主の**ロチルド男爵**の知己を得て、ルノーに勤務する。まもなくフランスでは共産主義者排斥運動が起き、鄧小平はソ連に逃げ込む。ソ連ではモスクワ中山大学に入学して共産主義を学んだ。モスクワ中山大学の学生寮で、鄧小平の同室者が**蔣経国**だった。

蒋介石の息子の蔣経国は、少年時代から共産主義に感化され、トロツキーに心酔してモスクワに留学したが、6歳年上の鄧小平と波長が合ったのだろうか、二人は無二の親友となる。

昭和53年(1978年)に来日し、中国首脳として初めて天皇陛下と会見した鄧小平は、翌年には渡米して**カーター大統領**と会談、三権を掌握した元首であることを世界に誇示し、直後に台湾総統・蔣経国に全土統一を呼びかける。かつての無二の親友の要請を、蔣経国は冷淡に拒否する。

「統一には、また30年はかかるだろう」。蔣経国が口にした30年は、しかし、もうとうの昔に過ぎ去ってしまった。**中国共産党の軍**(紅軍・後の八路軍)が編成されたのは1927年。しかし共産党軍は蒋介石の国民党軍に各所で敗北し、当初21万人以上いた兵力は7万人以下に減り、周囲を完全に包囲され、壊滅目前となっていた。こんな状況下に起きたのが**西安事件**である。

蒋介石を襲った軍との間で激しい銃撃戦があり、双方で37名の死者を出し、蒋介石は拉致され西安に連行された。一般には拉致された蒋介石が、脅されて共産党軍壊滅戦を中止させ、国共合作が成立したと解説される。一方には、西安事件は蒋介石が仕組んだ大謀略との説も強い。

事件に深く関わる人物から本紙自身が聞いた話でも、蒋介石が描いた壮大なストーリーが浮上してくる。

——日本軍の進出を阻止するために国共合作を成立させ、日本軍がいなくなれば国共は内戦を再開、紅軍(共産党八路軍)が最終的な勝利を得るというストーリーだ。米英蘭など西欧から援助される蒋介石軍が勝てば、中国は西欧の支配下に入ることになる。それを拒否するために、蒋介石はわざと敗北を決意したという。まるで漫画のような話ではないか。

歴史を眺めて、後に作り上げられた捏造(ねつぞう)話だろうとの批判も聞こえてきそうだが、いくつかの傍証は、これが真実だと物語る。例えば「援蔣ルート」で米国が蒋介石軍に与えた最新鋭の兵器が、そっくりそのまま共産党軍に渡ったこと、国民党軍が武器弾薬を置き残して優勢だった戦場から敗走したことなどだ。もっと有力な傍証もある。

台北の国立故宮博物院の宝物だ。清王朝時代の紫禁城には、中国中の秘宝が全て集められていた。紫禁城の故宮博物院に集められた秘宝は117万点以上だった。昭和7年(1932年)に満洲国が建国され、日本軍が中国北部に侵出し始めたとき、蒋介石は博物院の重要な秘宝を1万3,000箱以上の木箱と64個の包みに収め、当初はこれを南京に移動させた。

その後、日本軍が南京に侵出してきたので、これらの木箱や包みは中国各地に分散され、第二次大戦後の国共内戦の間、あちこちに移動させられた。そして最終的に、これらの宝物はすべて台北の国立故宮博物院に持ち込まれたのだ。木箱も包みもすべて傷一つない状態だった。国共両軍の激戦の中、敗走を重ねる国民党軍が持ち運んだ1万個以上の木箱や包みが無傷だった——。

国共内戦がシナリオの下で戦わされたということが、ここからも理解できる。

この間の深い事情を知る人物がいる。名前も身分も立場も明らかにできないが、中枢にいた人物である。西安事件以前に蒋介石が明かした本心の概略を、彼は静かに語る。

「国府軍(国民党軍)が勝てば中国全土は西欧列強の掌中に落ちる。だが共産党軍が勝っても中国は強国にはなれない。中国人は心の奥深くまで腐敗している。賄賂(わいろ)まみれで、自ら進んで技術を磨くことがない。中国にわずかに残る優れた人材と技術、古来の宝物を一か所に集めて嚴重に保護し、その後、中国の全人民を改造する必要がある。蒋介石は、本気でそう考えていた」。

その後の歴史がどう流れたか、あるいは蒋介石と毛沢東・周恩来の間にどんな密約があったか、それは問題ではない。現在の世界情勢下で台湾はどうあるべきか考える必要がある。

——多くの識者はそう語る。それは正論だ。そして同時に、台湾の未来を決めるのは台湾人である。それは曲げることができない。隣接する国であろうと周辺国であろうと、台湾の問題に余計な口出しはすべきではない。それを肚に銘じて台湾の情勢を分析すべきだろう。

「人民解放軍が飛躍する好機」という論文

昨年(2020年)10月20日に、中国国防大学の**劉明福**(りゅうめいふく)教授が、習近平体制下における人民解放軍(中国軍)の戦略思想とその意義を『**新時代中国強軍夢(新時代の中国の強軍夢)**』(全10章)という書で明らかにしている。著者の劉明福は人民解放軍に入隊後、10年間は作戦部隊に、続く20年間は戦区機関を務め、その後国防大学に17年間在籍した現職の大学教授であり、**「全軍優秀共産黨員」**にも選ばれている叩き上げの軍人である。今日の中国軍の中枢が何を考えているかを知る上では、参考になる書だ。大雑把にこの本の内容を見てみよう。

2018年10月の**党大会**(中国共産党全国代表大会)で**習近平**は**「新時代の特色ある社会主義の偉大な勝利を勝ち取り、中華民族の偉大な復興という中国の夢の実現のために、怠りなく努力すること」**と宣言した。劉明福の本はこの習近平演説を基本としている。

中国の基本戦略として、習近平は14の方針を明らかにしたが、劉教授はその中の**「党の人民軍隊に対する絶対的指導」**を第一に挙げている。ソ連邦崩壊の最大の理由は、党と軍が一体化していなかったためと中国は分析している。ソ連では軍が党を無視し、人民のための軍になった。

それが国を崩壊させてしまった。党が軍を完全掌握していれば、ソ連は崩壊しなかった。中国では、党が軍を指導することが絶対なのだ。その上で、中華民族の偉大な復興と言う戦略実現の

ために「**強軍建設**」が重要だと説いている。さらに中国は大国として唯一、国家統一がなされておらず、そのうえ周辺国家との間で、領土問題で争い海洋権益でも争っている。

その最大問題であり且つ、全てが集約されているのが「**台湾問題**」であるとしている。台湾を「**争ってでも奪取する**」か、または「**平和裏に統一する**」ことに最大の努力を注ぐ必要がある。

そのためには武力使用を念頭に、何よりも台湾独立派に対して断固とした威嚇（いかく）と威圧を加えるべきだ。この点に関してはチベット問題もウイグル問題も同様であるとする。これを実現するためには、何よりも強大な軍事力が必要だ。だが人民解放軍の現在の水準は、世界の先進的な軍の水準に達していない。世界一流の軍隊を建設しなければならない。その世界一流に関して、**劉教授**はこう記している。「**武力に第2位はない。武力は第1位でなければならない**」。

毛沢東は中国を「**立ち上がらせ（站起来）**」、**鄧小平**は「**豊かにした（富起来）**」。習近平は最後の飛躍「**強くなる（强起来）**」を実現しなければならない。その好機が、いま訪れているという。

中国の真の敵は？ 「人民解放軍が勝利すべき敵」

人民解放軍が勝利すべき敵の筆頭は「**米国**」である。米国は建国からこんにちまでの239年間の歴史の中で222年間は戦争をしており、世界で最も好戦的な国家である。

その米国の仲間（劉教授は「**群敵**」と名づけている）として、4つがある。

- 1、**ファイブ・アイズ（米・英・カナダ・豪州・ニュージーランド）**
- 2、**NATO 諸国**
- 3、**周辺の「反中国」連盟**
- 4、**台湾・ウイグル・チベット・香港のそれぞれの独立派など、内部にありながら敵と連盟する組織**

4つの群敵それぞれに分析がなされているが、目を引くのは「**3・周辺の反中国連盟**」の中に日本が含まれていることだ。「**日本は潜在的な紛争当事国である。もし日本国内の米軍基地が攻撃されれば、日本はほぼ確実に紛争に加入する**」との分析も紹介している。特に日本が「**インドを防衛上のパートナーとしている**」点に警戒感を示す。中国が警戒することは「**四面楚歌**」となることだ

——劉教授はこれを「**狼煙（のろし）が四方で起こり、危機が四方に存在している状況が起きること**」と述べる。最大の敵である米国が、これら四方の群敵と結ぶことを警戒する。「**局地の紛争や衝突、戦争の背後に、必ず米国がいる**」——これが劉教授の分析である。

局地戦として中国は8つの戦場を想定している。**東北・東シナ海・台湾海域・南シナ海・西南・西部・香港・海洋航路帯**の8か所である。その中で第一にあげられる最重要戦場が「**東北戦場**」であ

る。東北戦場とはすなわち「朝鮮半島」を意味する。中国が恐れているのは、「北朝鮮の核・ミサイルを排除するために、米軍が軍事行動をとる」ことだ。中国にとって、朝鮮半島から旧満洲にいたる東北部は、北京に近いこともあり、最も敏感な地域といえる。

この東北戦場について、劉教授はこう書いている。

「高度の警戒態勢を維持し、部隊の即時召集態勢を確保し、時が来ればよく戦い、戦えば必ず勝つこと。朝鮮半島での重大な異変に対する準備を最優先し、最も複雑かつ困難な局面に基づいて、各種のあらゆる危機事態を分析し、軍事行動計画をあらかじめ策定して完璧にし準備工作を進め、いったん有事があれば迅速に対処し、中国の半島での戦略的利益を損なうことなく、国家の安全保障全般の安定を確保しなければならない」。

東北戦場に続く第二の重点戦場が東シナ海（東海）であり、「米国は中日間の東シナ海（東海）での戦いを念入りに計画している」と分析する。「米中戦争において日本は最も重要な国であり、米国は日本の軍事力を絶えず向上させ、中国と対立関係に持ち込もうとしている。中国が日本国内の米国空軍基地を攻撃する可能性がある」と強調している」と分析する。

それは即ち、米中戦争が始まれば、日本が米中両国の最大の目標になることを意味している。

この点について、劉教授の分析は正しいだろう。つまり、現在の日本は、オオカミとトラの間にいるウサギのようなものなのだ。**オオカミとトラ——米国と中国**。その両方から最大の標的とされる日本が、自立的防衛力を持たない限り、日本は戦場となる可能性が高い。

日本人にこの認識がどれほどできているのだろうか。正直なところ、心が寒くなる思いがする。劉教授の次の言葉にも真摯に耳を傾けたい。

「米国は常にアジアを分断し、日中を対立させ、東アジアをコントロールしようとしてきた」。

中国統一戦争の戦場「台湾」

「中国統一戦争の準備を十分に行わなければならない」

——劉教授は台湾統一のための戦争を「人民解放軍の最大の使命」と位置づける。

習近平は2019年1月2日の『台湾同胞に告げる書』でこのように語っている。

「平和統一の見通しに最大限の努力をする。しかし、我々は武力の使用を放棄することはない、あらゆる外部勢力の干渉とごく少数の台湾独立勢力とその分裂活動に対し、あらゆる必要な措置を採るとの選択肢を留保する」。劉教授はこの立場を堅持する。

「我々は平和の理想を持っているが、平和の幻想を持ってはならない」とし、台海戦場では「武力統一」の原則に立つと明確に述べている。

さらに米国は「台湾を利用して中国を制する」との戦略を変えていないとして、台湾で内乱か外部勢力の介入があれば、「中国統一戦争」を迫られるが、武力戦に勝利して、国家統一を実現している。劉教授はこうした原則論に立った上で、「強軍夢」を実現するスケジュールとして3段階の飛躍を示している。

1、2020年までに機械化と情報化を実現する。

2、2021年から2035年までに全面的な軍事理論・軍隊組織形態・軍事人事・武器装備の現代化を達成するとともに、軍の9個体系である、軍事理論・連合指揮・新型軍事管理・現代軍事力・新型軍事訓練・新型軍事人材・国防科学技術の創新・現代軍事政策制度・軍民融合の各体系を構築する。

3、2035年から2049年の間は、中華民族の偉大な復興と言う中国梦の実現を成功させるときであり、強軍夢を実現させ、世界一流の軍隊を全面的に建設する。

実に長大な計画だが、これは「2049年」に中国が「偉大な復興」を成就するためのタイム・スケジュールなのだ。なぜ2049年なのかといえば、1949年から「100年後」だからだ。

——1949年10月1日、北京の天安門に毛沢東が立ち、中華人民共和国の建国宣言を行ったあの日から「100周年」にあたる。この日に、中国が「世界NO.1」になったとの宣言を公表することが「中国梦」なのである。従って台湾は、「2021年から2035年までの間に」統一されなければならない。劉教授はその問題に関し、こう述べている。

「台湾問題は広い視野で深く考えねばならない。台湾に対する軍事闘争では、台海(台湾海域)・東海(東シナ海)・南海(南シナ海)の3つの海を連動させ、統一夢・中国梦・世界夢の3つの夢を一体化し、組織の配置を適切にし、総体として推進することが必要である」。

習近平中国の明日

劉明福の書『新时代中国強軍夢(新時代の中国の強軍夢)』は市販本であり、日本でも購入することができる。読もうと思えば(中国語が理解できれば)誰でも読める。つまりこれは、台北で市街戦を戦い抜く人民解放軍の映像ビデオと同じ意味を持ち、台湾に対する威嚇(いかく)が籠められているものだ。

そして同時に習近平が目指す中国の目標が掲げられている。しかし現在の中国が、新型コロナ以降の経済悪化に苦しんでいることも事実だ。コロナ禍で苦しんでいるのは中国だけではなく全世界に共通しているが、それにしても中国経済は厳しい。昨年(2020年)10月に中国外貨管理局は、中国の外貨準備高が前月比で220億ドル(約2兆3,000億円)減少したと発表した。

巨額のマイナスだが、ネット上ではこの数字に疑問符が投げかけられ、「**実際はその10倍ぐらいだろう**」といわれている。さらに中国は物流の悪化で苦しんでいる。昨年末に貨物需要が増加したときに、運輸業界の人手不足が表面化し、深刻な問題となった。加えてコンテナ不足で物流が滞ってしまったのだ。年末は何とか乗り越えたが、危険水域にある中国の物流業界が復活する見込みはない。物流の悪化は、長期に亘って中国経済の立ち直りを阻害する。中国共産党内部の権力闘争も苛烈を極める。**団派**（共産党青年団）と太子党の激闘はよく知られている。

太子党の**習近平**と団派の**李克強**（背後に**胡錦濤**）の対立は、上海対北京の戦いとなり、中国が分裂するのではないかともいわれている。習近平は太子党であり、同時に上海派。上海閥の頂点に立ち、中国のエネルギー利権を握る江沢民の力を借りて国家主席に上り詰めたが、その江沢民派・上海閥と習近平の関係は悪化している。各所で対立を深めているのに、なぜ習近平は圧倒的な権力を振るえるのか。

習近平の背後に、相当な実力者がいると考えられる。一般的には全世界に広がる**客家**（はっか）が習近平のバックについていると解説されることが多い。客家グループは天文学的ともされる莫大なカネ（**簿外資産**）を動かしており、これが習近平を支えているというのだ。信じていいものか否か、判断に苦しむが、その可能性は否定できない。

習近平の背後に仏教僧が存在するとの噂がある。政治経済から軍事・国家の指針に至るまで、習近平はある僧侶の判断を参考にしていうのだ。宗教を認めない共産主義国家のトップが仏教僧の知恵を借りるなど、にわかには信じ難いが大国のトップの多くが宗教的な、あるいは神秘的な能力者を頼りにしていることは事実だ。

習近平の背後に仏教僧がいるという話は、政権中枢に近い筋からも漏れ伝わってきている。

ひそかに口伝てに語られるその僧の正体を追っていくと、河南省の有名な寺の**方丈**（住職）で、数年前に河南省から北京に移住したという。執務中の習近平が時折ゆくえ不明になるのは、その方丈に会っているのかもしれない。さらに噂話を追うと、方丈は女の子を養子に迎えたが、彼女はやがて成人し、日本人と結婚して東京に住んでいるという。

河南省とは黄河の南側にある省で中原と呼ばれ、**中国文明発祥の原点**とされ、歴史に名を刻む土地が多い。仏教寺院も数多く、**達磨大師が面壁九年の修行**をやったことで知られる**嵩山少林寺**も河南省にある寺院だ。ここにはまた、中国で最も古い寺である白馬寺もある。**白馬寺**は弘法大師空海も訪ねた寺で、日本とも所縁（ゆかり）が深い。

いくつかのヒントをもとに本紙が調べたところ、該当する方丈はすぐに判った。しかもその方丈が習近平と並んで写っている写真も見つけることができた。ただし、これが習近平の背後で国家

の指針を握っている人物とは特定できないため、ここでは名を伏せる。驚いたことにこの方丈は平成の時代に、少なくとも2度、比叡山延暦寺を訪れている。延暦寺といえば天皇家と深い関係を持つ寺だ。強権を振りかざし、全てを自分の思い通りに作り変えようとする習近平の奥底に、表面からはうかがい知ることのできない戦略・策謀が張り巡らされている可能性がある。

ただしその知略は、おそらく未来永劫、隠され続けるだろう。

新型コロナ騒動さえなければ、習近平は昨年4月に来日するはずだった。昨年11月末に**王毅外相**が来日し、**菅首相・茂木外相**などと意見交換を行った。このときの王毅の本当の目的は、日本政府が習近平の国賓としての来日要請を行えるか否かの打診にあったとされる。

なぜ国賓にこだわるのか。

国賓として来日した国家元首は、天皇陛下と会見する決まりになっているからだ。習近平は是が非でも**今上陛下との会見**を求めている。その深い意味を日本人のどれほどが理解しているだろうか。米国は大統領選で混乱混迷の中にあり、これから先の世界は東アジアが牽引する。

日本と中国が世界を引っ張っていく。その日本と中国は、しかし、歯車が合わず、合わそうともしていない。人類の未来を遠望したとき、今こそ日本と中国が本心で話し合うべきときだと思うのは本紙のみだろうか。■